財田翔悟展－ミクストメディア－

多くの人がそうかと思いますが、昔のことというのは結構覚えているものです。
私自身記憶力がいい方ではないのですが、なぜか断片的な会話の内容をよく覚えてたりします。「あの時、この人、こんなこと言ってたなぁ」という感じでふと思い出したりします。最近のことは全然覚えてないんですけどね。
ただ、その記憶が明快に過去の情景や感情を伴って思い出せるかというと自信はなくて、本当にあったのか、今の自分が作り出してしまったものなのかは判断がつかない部分があります。

記憶の中にある景色や音楽、匂いや感情はなかなか明確には覚えていない、もしくはうまく繋がらないものかと思います。前期の通り、記憶力に自信がない私ははっきり覚えている、という事柄は多くはありません。ほぼないと言っていいでしょう。
こうだったよなという覚えは他の記憶と混濁したり、時間や他の記憶がレイヤーのように重なったりすることで、元々の記憶の領域を侵食して、そこにはなかった新たな時間と風景を生み出すこともあります。同じ状況を共有した人たちと答え合わせをして、あれそうだっけ？となったことは誰もが経験することなのではないでしょうか。
人の記憶は曖昧だなと日々生きている中でそう感じる場面に出くわしますし、その時その時の自分の感覚や気分も反映されているように思います。過去は変動しない、はずですが自分の中の過去は今を生きている自分次第で変わってしまう部分もあるのかもしれません。
写真や日記などを頼りに答え合わせをすることは出来るかもしれんが、一部始終自分の見てきた風景を記録していることはまずないですし、ましてやその時自分が何を考え、何を感じていたかを明快に覚えておくことは困難です。結局は記憶も今の自分が作り出している感情の一種なのかもしれません。

その感覚というのは絵具が混ざる様子や重なり合って違う像を作り出す現象に近いのではとふっと感じました。
多数のレイヤーが重なり合い、混ざり合うことで曖昧ながらも形を保とうとする情景を自分の制作でも生かすことが出来るのではと考え、今までの身近な存在や風景をモチーフにはしつつ、その中でも感情や記憶をこれまで以上に取り入れた制作を試みます。

財田翔悟